

モニター会議概要

当研究所では、現地の実態を的確に把握し業務推進に活かすため、新進気鋭の農業者に現地モニターを委嘱し、さまざまなご意見をうかがう場を設けております。
本年度は、令和元年十一月一八日に札幌市で開催し、意見交換を行いました。以下その概要を紹介いたします。

現地モニター（敬称略・五十音順）

・天塩町 宇野 剛司
（酪農経営）
・新篠津村 大塚 早苗
（有機野菜・畑作・稲作経営）
・美唄市 貞広 樹良
（稲作・畑作・野菜経営）

・京極町 高木 智美
（畑作経営）
・音更町 津島 朗
（畑作経営）
・名寄市 中野 康則
（稲作・施設野菜経営）

一般社団法人 北海道地域農業研究所

・副理事長・所長 坂下 明彦
・専務理事 伊藤 則明
・常務理事 入江 千晴
・事務局長 片岡 省二
・研究部長 及川 敏之
・研究次長 堀田 貢
・コーディネーター
・顧問 黒澤 不二男



坂下所長

坂下 本日は、モニター会議にご出席いただきありがとうございます。本年から研究所長を担っておりますがよろしくお願ひします。

当研究所も来年には三〇年を迎えますが、三〇年前を思い起こすと、研究所の命名が思い出されます。はじめは「地域」が入っていない案でありましたが、札幌だけで考えるのではなく、やはりそれぞれの地域や農村をベースとした研究活動の視点を置くことが大事であり、北海道地域農業研究所という名前にしました。その「地域」という名前を付けた研究所ならではの、各地域の皆さんからのお話を聞く機会を作っていきたいということでモニター会議を始めており、このような機会をこれからも

大事にしたいと思っています。今日は黒澤先生の司会の元、皆さんからいろいろな話を聞かせていただければと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

黒澤 本日の進行役を務めさせていただきますが、こ

のような場で皆さんから提供いただく情報は非常に貴重で、地域農研の会員の方々、地域農研職員・スタッフに有益な示唆を与えてくれるものと期待しております。どうかよろしくお願ひします。

はじめに、本年の経営状況について、モニターの皆さんのご報告をいただきます。高木さんからよろしくお願ひします。

高木 今年は、私の経営においても、管内のようてい農協としても豊作でした。馬鈴薯、人参、小麦、豆類ともよかったです。馬鈴薯、人参の価格が安いこと、春先、気温の変動が大きく、アスパラ、蔬菜があまりよくありませんでしたが、特に変ったことのない、安定した年でした。

黒澤 ありがとうございます。では大塚さんどうぞ。

大塚 私のところでは、今年二品目の有機野菜を作っています。夏場はミニトマトが一番多く、ハウス四棟作っています。今年は出足がとても早く、収穫も追いつかない状況でかなりの豊作と思いましたが、最終の収穫量は例年並みという状況でした。ミニトマトも大規模にしていくと管理が行き届かず、

「なり疲れ」で後半落ち込むということがあるようです。十分に手が回り切れていなかったというのが反省点です。それ以外の作物ではサツマイモは結構豊作となり、お米は例年並みでした。

黒澤 貞広さんお願いします。

貞広 私は米主体で、収穫前は豊作かという期待がありましたが、いざ収穫してみると平年並みでした。麦、大豆も平年作でした。米については夏場の高温でカメムシの発生が一部にあり、品質にも少し影響しました。また、今年は一〇haほど基盤整備工事が入っていましたので、作業的には楽な面もありました。

黒澤 最近、米の品種間格差が目立つということも聞きますが、いかがですか。

貞広 今年の「おぼろづき」の収量が少なかったですね。「ななつぼし」はまずまずでした。平均すると八俵くらいでしょうか。

黒澤 では津島さんお願いします。

津島 私の経営面積は今年一〇%増えて一二〇haほどになったことから、馬鈴薯は休み、営農作物は小麦、てん菜、大豆と野菜では人参等の品目を作っています。豊作年は野菜関係が安くなっても他の畑作物の収入が多く、また、凶作年は野菜類の値上がり分の収入があるというバランスで、あまり経営はぶれないできていたと感じています。一方、増えた農地では、土地改良が必要なところがあり、現在、暗渠工事に取り組んでいる最中です。

黒澤 では中野さんお願いします。

中野 私は水稻一〇ha、ミニトマトをハウス六棟作っていますが、ミニトマトは平年並みで、もち米は豊作でした。ミニトマトは例年は三分の一はジュースにし、あとは農協を通して市場出荷していますが、今年は台風一九号の影響か市場価格が高めに推移したので、市場出荷を多めにしました。今年はミニトマトを市場出荷している人は、収穫量も悪くなかったので経営上もまずまずと聞いています。



高木さん

大塚さん

貞広さん

津島さん

黒澤 名寄はほとんどがミニトマトになっていのですか。

中野 いえ、主流は大玉です。

黒澤 それでは宇野さんお願いします。

宇野 今年は春先五月中の気候が良く、牧草もかなり良いものが取れました。でも六月は天候がぐずついたので、やる時期によって良し悪しが分かれました。八月から天候がまた良くなったので、良い乾牧草に仕上がっています。今年は天候が

比較的良くもった方なので、私は作付けしていませんが、天塩町内のデントコーンも結構収量があったようです。

私の農場では、今年、有機認証を取得しました。海外での有機の引き合いもあり、輸出も一・五トンほど取り組みました。

黒澤 ありがとうございます。私が現地を回っている中でも、ほぼ皆さんと同じようなお話を聞いています。大型台風が北海道に影響を及ぼすか心配していましたが、主要農業生産についてはそれなりに推移したということで、ほっとしています。

では、モニターの方々から、追加でお話したいことがあればお願いします。

津島 地域の話で特徴的なことでは、今年の十勝は、春先ひどい干ばつが続きました。デントコーンの発芽不良は初めてという人や、大豆も一週間、一〇日遅れ、さらには発芽しないのではという人もいます。本来に大変な状況でした。七月からの好天で奇跡的に回復しましたが、河川流域の砂地や石原の地帯では、小麦が干ばつの影響で二次成長を起こすなど凶作となり、廃耕にした人もいます。

総体として小麦は豊作だったのですが、中にはそのような事例もありました。

黒澤 長沼では小麦一四俵とれたという方もおり、聞き間違いかと驚いたのですが、条件の良いところでは、特別なことをしなくとも一〇俵とれており、非常に気象条件に助けられた年であったのかと思います。一方、津島さんが言われたような地域、地帯では干ばつによりまた異なった状況があったと気づかされました。豆類の生育初期の発芽の問題の話もありましたが、現在、小豆など道産豆類については、昨年までの不作の影響から品不足の問題が言われており、作付体系などの見直しも進められると感じています。また、芽室町の農家の方ですが、小豆の密植栽培の比較対象栽培に取り組んでいる事例があり、創意工夫しながらの新たな取り組みが見られます。必ずしも密植栽培を技術体系として推奨しているわけではないのですが、農家の方々が自分の責任でチャレンジしているというものです。そのように、今年いろいろな新たなチャレンジをしている方もおられるようなので、その辺りを中心にお聞かせ願います。では高木さんから。

高木 最近、地元のような農協が、「きたかむい」という品種をポテトチップス用として湖池屋に出しています。他に士幌農協産の「ひかる」、きたみらい農協産の「スノーマーチ」と三種類で「ブランドいも食べ比べ」というプレミアム商品として期間限定で出しています。もともと「きたかむい」はチップス用ではないのですが、シストセンチウ抵抗性品種で、芽が浅く、二月を超えてから甘みがすぐ出てくる白色系の芋です。これまで作付けしていた品種の収量が伸び悩んでいることもあり、これから少しでも需要が増えたいなと思っています。

黒澤 では大塚さん。

大塚 新篠津は家族経営で水稻・畑作をやっているところが多く、それにプラスしてブロッコリー、白菜、ピーマンとか若干野菜をやっている複合経営の農家が多いのですが、高齢化して手間のかかる野菜が作れず、野菜はやめて米・麦・大豆だけにしようという動きが見られます。

うちはそれに逆行して野菜をたくさん作っていますが、なかなか農地が出回らないので土地も増やせず、いまだに新篠津村



大塚早苗さん

の平均耕作面積より狭い土地でやっています。売上を上げていかなければならないのでハウスを増やしている状態ですが、そのため、さらに人手が必要になり、外国からも入れています。今年は一棟目の外国人寮を作りました。今年は中国人四人とタイ人二人でしたが、来年は中国人五人とタイ人四人になる予定です。

黒澤 それは特定技能の外国人に来てもらっているのですか。

大塚 まだ特定技能の人はなくて、現行の技能実習一号、二号のひと、タイ人は留学生で四カ月間だけです。

黒澤 タイの大学のカリキュラムの中で農業実習があり、それを日本の大塚農場で実習しているということですね。

大塚 はいそうです。その学生たちはタイの大学で農業を勉強しているのですが、農家の後継者も多く、帰ってから農業をやるという学生も何人かいます。

黒澤 地域農研においても外国人労働者について調査しており、先月沖縄へ現地調査に行きました。沖縄は特区と新しい制度を上手く融合させた形で外国人を入れており、農協が派遣主体になるという珍しい、全国でもトップをきった形で対策を行なっているところです。

ところで、息子さんが、素晴らしい賞を受賞されたとお聞きしましたが。

大塚 「日本学校農業クラブ全国大会」という農業高校生による全国大会で、おかげさまで最優秀賞をいただきました。

黒澤 しっかりした後継者がいて心強いですね。おめでとうございます。

では貞広さんお願いします。

貞広 美唄では「グリーンツーリズム」というか、修学旅

行生の受け入れを一五年くらいやっています。一番多い時で年間六〇人以上受け入れていましたが、農家の高齢化、面積拡大による人手不足で受け入れ生徒数が年々減っており、現状は一二〇人くらいです。新たな取り組みとして、農家だけでなく地域全体で受け入れということ、農林水産省の農泊推進事業を活用し、「アルテピアッツァ美唄」という施設を拠点とし、観光バス会社、JAびば



貞広樹良さん

い、農業者等からなる協議会での取り組みが今年から始まりました。駅前にホテルも来年開業する予定で、インバウンドも含め、農業者にも何かメリットになるようなことができないかと考えています。

黒澤 できればアルテピアッツァ自体に宿泊施設があればいいのですが、すごく刺激になりそうなお話ですね。ところで、昨年お話をいただいた新卒採用の女性従業員は頑張っていますか。

貞広 二年目ということで仕事にも慣れ、大変活躍してくれています。今年、大型特殊の免許も取りコンバインの収穫作業も随分やってもらいました。

黒澤 大変安心しました。
では津島さんお願いします。

津島 我が家の前を通る道路に「メロディライン」という名前がつき、十勝川温泉までの観光ルートということで、商工会との取り組みで月一回くらいのイベントを沿線でやっています。カフェやレストランも商工会関係の方が出店するなどしています。ここ二年くらいは年二回、収穫体験などの様々な取り組みも行っており、徐々に定着しつつあります。ただやっている農家はほんの数軒で、商工会の方々や地域全体に広がるものになるかどうかかわからないというのが本音です。観光での交流人口を増やして少しでも音更町のPRに貢献できればという思いでやっていますが、もともと畑の真ん中を通っている道路でもあり、農業生産活動を専業にする人にとっては「交通量が増えて危ない」とか「勝手に車を止めて写真を撮る」とか、「ゴミが増える」など、「地元にとってはあまりプラスではない

のでは」という意見も結構あります。

黒澤 美瑛にも同じような悩みがあると聞いていますし、特に最近、外国人観光客に対して、観光地や農村でも若干拒否反応を起こしているようなところも出てきていますね。

津島 自分たちもいろいろな所へ観光に行き、景色を感じたり、土産を買って「ああ、よかった」で帰ってきます。それだけで終わっていますが、本当は「そこに生きている人たちが何を考えて生活しているのか」というようなことを伝えるまでの観光にしないとダメではないか、定着しないのではないかと強く思っています。では、それを伝えるような観光とはどうしたらいいかといえば、非常に難しいですが。

先ほどグリーンツーリズムの話がありました。十勝でもはじめてちょうど一〇年になりますが、一番多い年で三、〇〇〇人くらい入れていました。受入農家の戸数が減りつつある中、さらに広げようとするときに、これまでと変え「年一回くらい入れてみませんか」というスタンスに切りかえようという話も出ています。今までは、一戸で五回も六回も受け入れており、時期によっては見せるものもなく、奥さん方の気苦勞も大変でし



津島 朗さん

た。受け入れることで、自分本来の姿を伝えられることの喜びもあり、そういう部分はとても大きいことも思うので、そういうことも踏まえながら広げることができればと思います。

黒澤 長沼でもどんどん受け入れてきたピークがあり、今は若干下り坂気味で、一定のレベルに収束しているところかなと思います。「身の丈に合った」というような受け入れ体制が必要なのかもしれません。

津島 現地の課題ということでは、高齢化の中で農業を辞める人も増えつつ、確実に周りの方々全てが規模拡大に向かっています。規模拡大が進むと手間のかかることができなくなり、野菜の作付けをやめていく人が出てきています。そして規模拡大によって負債が発生し、それを返すのにまた野菜を作るといふ現象が発生しています。しかし、労力的にどうこなしていく

かという答えがないなかでの対処であり、あまり解決策になっていません。現在、人手不足対策では、働きたい人と人手を求める農家のマッチングを地元農協が試験的にやっています。一方、各農協においては、本州、四国、九州の農協と連携をとり、労働の端境期の違いを融通しあいましょうということで、まだ少数ではありますが、初めて北海道へ来た人に、まず北海道を理解してもらおうとしています。

黒澤 それは農業者同士が行き来するということですか。

津島 そのような形です。その中で、雇用者で北海道にも行ってみたいという人があれば紹介し合えないかという話も出てきています。

黒澤 地域農研でも富良野、愛媛、沖縄の三地域の広域連携の調査を行っています。そこで雇用している短期アルバイトが富良野、愛媛で働き、更に沖縄へ行ってまた富良野に戻ってくるという、短期滞在型の季節労働者の方々のネットワークを作るといったものです。そういうものとは別に、農業者同士が端境期を利用して研修を兼ねて手伝いに出向き、他の地域の農業

を知り、知見を広めて自分の経営にも役立てるといったパターンのところもあるようです。小清水では愛媛とそのような形を取っていて、青年部の研修プログラムや農協の業務に組み込んで、組合員、農協職員一緒に派遣しています。参加した人に聞くと、非常に刺激になったとのこと。実際に農業者自身が他所へ行って働くというのは少なく、新しいチャレンジとして非常に

参考になりました。



黒澤顧問

中野さんは自分の農場に新たな機器や施設を導入してチャレンジしていると聞いていますので、その辺の話も含めてお話しください。

中野 私の住む中名寄地区は、基盤整備が進んでおり、水田は一枚が約2ha前後になっていますが、二年前からドローンによる防除を取り入れています。一週間前に自動操縦を習ったのですが、完全な手ぶら運転では無いですが、本当に衝撃的でした。日本ではまだ認められていませんが、一回の操縦で複数機動かせるらしいのです。多分水田農家の防除は完全にドロー

ンに移行するのではないかと感じています。ただバッテリーの問題があり、これが解決するともっと革新的なことになると思います。積載量も今のは一六ℓですが、もっと大きなものが出るようです。

黒澤 中名寄全体の農地面積はどれくらいですか。

中野 一三〇haほどで、そこにラジコンヘリから切り替えて四チームで四台入っています。ラジコンヘリに比べドローンは扱う上での安心感が違います。性能も向上しており、墜落や物にぶつかる危険性もなくなっています。

津島 水田だけでなく、畑作でもドローンはすでに利用されています。

中野 水量が多い防除にはまだまだ不向きなのですが、農薬の性能が上がれば利用は拡大すると思います。

津島 やはり自動操舵が決め手になりますね。

中野 モデルチェンジが早く、長期で交換部品が手に入らないという難点もあるのですが、その代わり毎年ドローンは革新的に変化しているので、目が離せないですね。

黒澤 また後ほど今の新しい技術体系の話は皆さんに振りたいのですが、中野さんのチャレンジのお話をもう少し聞かせてください。

中野 水田は稲播き、田植えの時期が一番大変なのですが、今年は昨年まで雇っていた二人が病気で来られなくなりました。それで私が作ったトマトジュースを東京へ売りに行っているときに知り合った仲間五人に声をかけたところ、五人全員が来る



中野康則さん

ことになりました。飛行機代はこちらもちで、宿泊は僕が建てたゲストハウスと三台のキャンピングカーに泊まって自炊してもらい、稲播き・田植えを手伝ってもらいました。泊まり代はタダで労賃は謝礼程度という条件です。東京の

人は来ないだろうと思っていましたが、こちらが非日常体験を提供するといえ、意外と来てくれるものだと実感しました。キャンピングカー（中古で二〇〇万円ほど）にしたことで、私の家族と体験者双方のプライバシーもきちんと守られることもよかったのかと思っており、来年もお願いする予定です。

また、旅行会社を通じて、餅つき体験がしたいというシンガポールの富裕層の方が三人来ました。この富裕層の人たちは、もう物はいらない、その代わり餅つきという体験をしてみたいというのです。私たちにしてみれば、こんなことがという餅つき体験にすごく感激し、来年も来たいとも言っていました。この人たちは移住も考えたいと言っていました。治安が良く、道路も整備されているというのはなかなか考えられないらしく、きちんとPRをすればこういう富裕層の人は来るのではないかと思います。畑の方の倉庫も改装して水洗トイレをつけましたが、旅行会社が言うには水洗トイレがあることは必須条件で、それがどうかで行くかどうかを決めるそうです。

黒澤 観光客もそうですし、人を雇う場合でも衛生環境が大事ですね。私も二〇年ほど前、芽室の大きな農家へ行った際、他の農家は人手が足りないのにそこは沢山雇用者がいる。その

理由は休憩室、トイレが綺麗、更衣室なども完備していてそれが誘引になっていました。

非常に貴重な情報ありがとうございます。それでは宇野さんお願いします。

宇野 私のところではカフェもやっており、外国人観光客がよく来られます。牛が見たいということで、私が牧場を案内しますが、特別観光用に整備していないのが、「ビジネスっぽくなく、そのままの状態が見られるのがいい」と言われます。そう言ってくれる方は喜んでくれるのだという印象をもっています。



宇野剛司さん

天塩町の最近の状況ですが、補助事業もあり、牛舎建築など施設導入が進んでいます。そのなかで、農協と農家六軒ほどで共同出資し、ロボットを入れ大規模化したところがあります。そのような動きが出はじまりましたが、ロボット、牛舎は作っただけで、牛の値

段も高いので増頭するのになかなか苦戦しています。また、人手も足りていないようです。当初はロボットなので自分たちが対処しなくてもいいだろうと思って始めたのが、募集しても人が集まらない。そのため全ての作業を自分たちでやるしかなく、当初の予定とは全く違う状況になっています。

また、私の地域では、六軒の参加者で、社員一名を雇用したTMRセンターが一つ稼働し始めています。そこでも人が集まらず、六軒総出で全ての牧草やデントコーンの収穫をしています。個人であれば、自分の都合で作業できますが、グループ、会社として動いているとなると、そうともいかず、夫婦二人のところなどは、かなり負担がかかっているようです。人手不足というのは、やはり大きな問題になっているということです。私のところでは、最近、ベトナム人の外国人研修生が二人来たので何とかまりました。加工もやっているの、酪農作業プラス加工作業で女性二名に来てもらいました。

商工会の話が先ほどありましたが、僕も商工会の青年部と農協の青年部に入っていますが、どこの団体もあまり人がいない状況です。それでも地域を盛り上げたいということで、年一回漁協も加えた三団体でイベントをやっています。他の団体と顔を合わせ、楽しくやっていますが、ほぼ決まったメンバーで新

しい人の参加がないのが実情です。若い人はいても、青年部や地元の団体にはなかなか入会してこないのが最近の状況です。

黒澤 今の宇野さんの話で非常に印象的だったのは、TMRセンターの話です。普通TMRセンターは運営主体が農家の人で、出資する構成員も作業はしますが、それ以外に雇用スタッフがいいて、それ故に構成員の人たちの作業サポートができるというものです。しかし組織の専属スタッフがいなくて全部それを構成員でやるとなると、かつてあった共同作業、協同組織とどこが違うのかということになります。天塩のような比較的面積が大きいところでは、TMRセンターが上手く機能すれば個別経営に対する支援機能はかなり期待できると思いますが、抱えている問題はかなり大きいと思います。

宇野さんは加工に取り組んでおられますが、加工した製品の販売、流通についてもお話してください。

宇野 今年はソフトクリームや牛乳の要望が多く来ており、加工メーカーとの取引も始めました。また、本州の方からの取引要望も増えています。輸出は今年も一・五トンくらい出しましたが、「オーガニックが欲しい」と海外のメーカーには言われ



津島さん

中野さん

宇野さん

ます。オーガニックの専門コーナーはあっても日本製品はないようなのです。今年、初めてシンガポールで我が家の有機のものを販売させてもらいましたが、いろいろなメーカーからも声がかかりました。「北海道産のオーガニック」というのは向こうの方に好印象なんだと感じました。

黒澤 最近、豆の

えておいた方がいいのではと感じます。牛乳でも食品としての優れた部分があると思いますがいかがでしょうか。

宇野 元々オーストラリアの会社が持っているA2ミルク^(注)の遺伝子検査に関する特許について話がまとまり、今年から日本でも検査ができるようになりました。これまで海外のラボで一検体一万円以上がかかっていたものが、四、五〇〇円くらいまで検査費用が下がりました。商標としてA2を謳うことはできず、日本でA2ミルクがまだ広く知られていないので、商品としての差別化は難しいのですが。

(注) 牛乳にタンパク質として含まれるβカゼインに、遺伝子の違いでA1とA2がある。A2はA1より牛乳アレルギーを起こしにくいという学説があり、世界的にA2ミルクが注目されている。

黒澤 地域農研の方からも何か質問がありましたらどうぞ。

会議の時に海外の豆の生産・消費状況について説明され、「ベジタブルミート」(代替肉)がすごい勢いで伸びている、それはオーガニックを求めるのと底流では同じところから出ているということでした。植物由来のタンパクやその手の商品の流通が伸びるのではないか、といったことも新しい潮流として押さ

及川 先ほど中野さんから、ドローンがこれからどんどん農業散布で使われるのではないかというお話がありましたが、高額な機械が入ることのメリットと、どこまでそういうものが

入っていくかについて、感覚的で結構ですのでお聞かせください。

中野 宇野さんの話にもありましたが、どこでも人手不足という問題があります。これは僕の考えですが、ドローンの性能が上がっていくと、地域の防除は農協が請け負って何千ヘクタールでも同時にやる、という話が出てくるかもしれません。それとドローンは防除だけでなく追肥もできます。現在、衛星画像解析技術は窒素ばかりでなく、リン酸、カリについても進められています。そうなれば、収穫量の平準化、安定化もでき、それも米以外でもできるようになっていくのだろーうと思います。

及川 個人で持っている方が使い勝手は良いと思いますが、いろいろ考えると集団の方が望ましいのでしょうか。

中野 私は、当初購入価格は下がっていくだろうと思っていましたが、ドローンのメーカーに聞くと、性能を上げ、重量も増えていくので価格は上がる方向へ行くと言われています。そうであれば、個人が持って作業するよりも、撒いてもらえる団体を作った方が、金銭的な負担も減るし、防除の手間が減る

分他の仕事ができることになります。

津島 十勝での知り合いの農家は、「ドローンは安い」と言っている人がいます。普段防除で使っている機械は、牽引タイプが一番小さい物でも五〇〇万円くらい。大きいものになると九〇〇〜一、〇〇〇万円、自走式だと四、〇〇〇〜五、〇〇〇万円するようなものもあります。最近はその五、〇〇〇万円もするようなタイプを買う人も増えており、価格面や使用頻度を考えると、ドローンを何台か買った方が安いといっていました。



高木智美さん

高木 共同利用ではなく、自分の都合でいつでも使えた方がいいと思う人が多いのでは。

津島 使いたい時期は皆同じであり、自分のところとだけだけ使えるのかというのはあると思う。あらゆる農業が使える、免許も面倒ではなく、自動操縦で五機使えるとなれ

ば、爆発的に売れるようになる。時代は変わっていくでしょうね。

高木 それに伴って町や地域のほうもインフラ整備、環境整備もしていかないと、農業技術だけ先進的であってうまく活用できないというギャップが生まれませんか懸念しています。

大塚 私もドローンを見に行きましたが、石狩地域は小規模農家が多いので、そのような地域では、一軒で持つというより、コントラ事業的にどこかがやるという方法が現実的ではないかと思います。

黒澤 皆さんから地域の様々な情報や課題等をお知らせいただきました。ありがとうございました。以上で、モニター会議を終了いたします。

◆ ◆ 自主研究の成果が図書になりました ◆ ◆

当研究所は二〇一三（平成二五）年から、集落問題の専門家による研究班を設けて、自主研究「人と農地にかかわる集落対策問題」に取り組んできました。この度、研究班参加者を中心に、研究成果を取りまとめた図書が刊行されました。

図書名 『北海道農村社会のゆくえー農事組合型

農村社会の変容と近未来像ー』

編著者 北海道大学大学院 農学研究院

教授 柳村 俊介

札幌学院大学 法学部

教授 小内 純子

出版社 農林統計協会株式会社

定価 本体二、五〇〇円＋税

